

安宅イバノ本遺跡

—川崎町大字安眞木所在の埋蔵文化財発掘調査—

川崎町文化財調査報告書

第20集

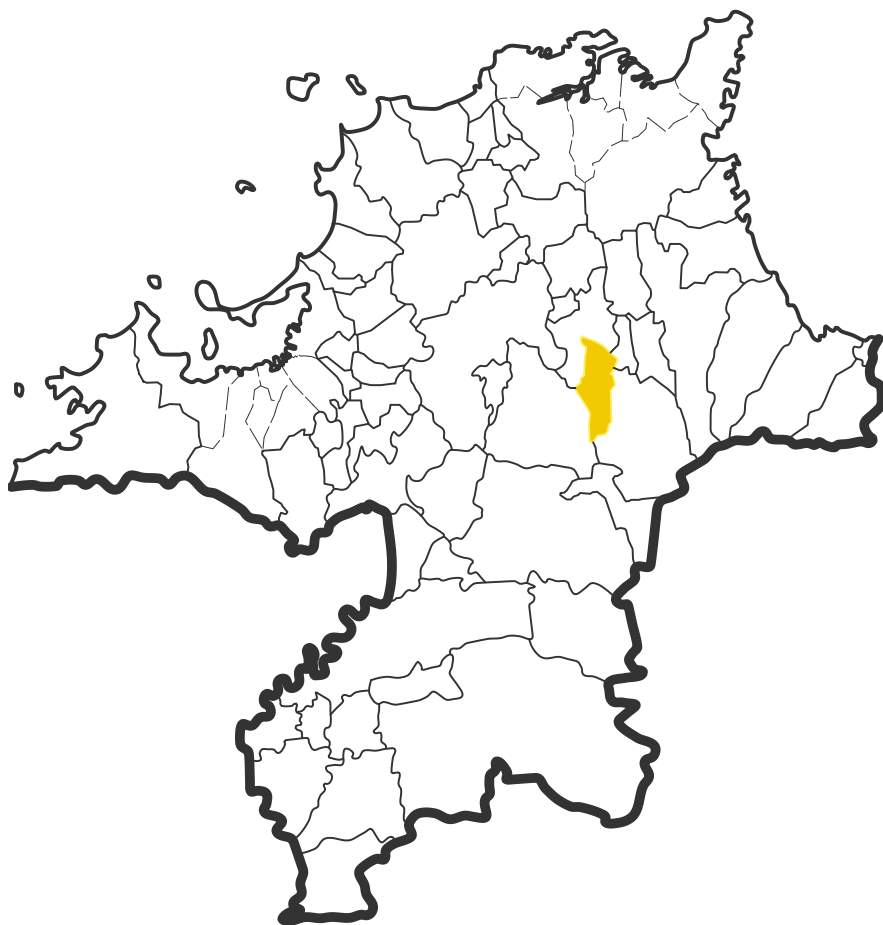


2021

川崎町教育委員会

安宅イバノ本遺跡

—町道新設整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—



序

本書は、令和元年度に川崎町教育委員会が実施した川崎町大字安真木の安宅地区に所在する安宅イバノ本遺跡の発掘調査で、検出された遺構並びに出土遺物の内容を記載した埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

今回発掘調査を実施した安宅地区は古くからの農村地帯で、炭鉱が無かったため昔からの集落や生活様式及び文化が残っている地域です。ただ、山間部に所在するためこれまで数多くの土砂災害や水害が発生しており、その度に甚大な被害に見舞われました。そのため、これまで埋蔵文化財の所在が確認されておらず遺跡の空白地帯となっていました。しかし、今回初めて当地区で遺跡が確認され、調査を実施した次第であります。これを契機に新たな遺跡が発見されるとともに、埋蔵文化財の発掘調査が実施され、当地区の歴史解明が進むことを期待してやみません。

また、遺跡の記録を記した本書とともに、保管する遺物を通じて郷土の歴史や文化を振り返る時、郷土への敬愛思慕の情がより深まり、文化遺産に関する町民の意識向上や古里に誇りを持てる豊かな心を育てる教育文化のまちづくりに寄与し、文化的風土を創造することになると信ずる次第であります。

最後に、今回の調査及び整理作業にあたり、ご協力いただきました安宅地区の皆様、ご指導いただきました関係各位に心よりお礼申し上げます。

令和3年3月31日

川崎町教育委員会

教育長 小 峠 英 人

例 言

- 1 本書は、川崎町が実施した町道新設工事に伴い、令和元年度に川崎町教育委員会が実施した安宅イバノ本遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、現場での発掘調査を令和元年度に、整理作業を令和2年度の2ヶ年に分けて実施した。
- 3 発掘調査は、工事で新設が計画される約1,400㎡のうち、事前の試掘調査で遺跡が確認された約200㎡を対象として実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業に係る費用は、全額川崎町が負担した。
- 5 本書に記載する発掘調査及び出土遺物の整理作業は川崎町教育委員会が実施した。
- 6 本書内における遺構配置図は、株式会社CUBICの実測支援システム「遺構くん」を使用し作成した。
- 7 本書内における出土遺物は末吉隆弥が実測し、製図は株式会社CUBICの実測支援システム「トレースくん」を使用し作成した。
- 8 本書内における遺構写真は末吉と永末夏菜が撮影した。また、空中写真は一般社団法人田川ドローン推進機構に委託し撮影した。
また、出土遺物の写真は坂田修一（川崎町中央公民館長）と永末が撮影した。
- 9 本書内における方位は、全て真北（GN）を指す。
- 10 本報告書に掲載した図面及び写真等は、川崎町教育委員会が収蔵、保管している。
- 11 調査及び整理作業の体制については、本文中第1章に記したとおりである。
- 12 本書の執筆編集は末吉が実施した。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査の経過	1
第2節	位置と環境	3
第2章	調査の概要	
第1節	調査の概要	8
第2節	出土遺物観察表	15
第3章	総括	17
第4章	図版	19

挿図目次

福岡県内広域位置図		中表紙
第1図	安宅イバノ本遺跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7
第2図	安宅イバノ本遺跡全体図 (1/80)	9
第3図	井戸出土須恵器実測図 (1/3)	11
第4図	井戸出土瓦器実測図 (1/3)	11
第5図	井戸出土土師器実測図 (1/3)	12
第6図	井戸出土陶磁器実測図 (1/3)	12
第7図	井戸出土石器実測図 (1/2)	12
第8図	P i t 2 出土白磁実測図 (1/3)	13
第9図	表採土器実測図 (1/3)	14

挿入図版目次

遺跡の全容（航空写真）	表紙
挿入図版 1 安宅イバノ本遺跡発掘調査作業従事者	16

図版目次

図版 1	安宅イバノ本遺跡から戸山原丘陵を望む（航空写真・南から） 安宅イバノ本遺跡から戸谷ヶ岳方面を望む（航空写真・北から）
図版 2	安宅イバノ本遺跡全景 1（航空写真・北から） 安宅イバノ本遺跡全景 2（航空写真・南から）
図版 3	安宅イバノ本遺跡全景 3（航空写真・真上から） 安宅イバノ本遺跡 1 区全景（航空写真・真上から） 安宅イバノ本遺跡 2 区全景（航空写真・真上から）
図版 4	安宅イバノ本遺跡 1 区全景（北から） 安宅イバノ本遺跡 1 区南側及び 2 区全景（北から）
図版 5	安宅イバノ本遺跡 1 区井戸掘削状況（東から） 安宅イバノ本遺跡 1 区井戸掘削状況（南東から）
図版 6	安宅イバノ本遺跡出土遺物写真 1
図版 7	安宅イバノ本遺跡出土遺物写真 2
図版 8	安宅イバノ本遺跡出土遺物写真 3

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

令和元年8月5日、川崎町は本町大字安真木の安宅地区において町道イバノ本大井手線整備工事を計画し、計画路線内に係る文化財の所在の有無について川崎町教育委員会（以下、「教育委員会」と称する。）へ照会を行った。安宅地区には当時周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、「包蔵地」と称する。）が無く、これまで様々な開発事業に伴う試掘調査や工事への立会い等数多くの事前調査を実施しても遺跡が確認されたことはなかった。今回照会があった場所は、安宅地区の中央を南北に流れる安宅川から少し東へ離れた山裾に面する高台に位置しており、安宅地区の菩提寺である行春寺が存在するなど、安宅地区で一番立地条件に恵まれた場所である。物証は得られていないが、安宅地区で数少ない土器の出土例が報告された場所でもあるため、教育委員会は工事に先行し重機を使用した試掘調査を実施することにした。

現地には重機が入る道が無かったため、10月7日から人力による伐採作業を開始し、11日から21日まで重機による試掘調査を実施した。試掘調査の結果、一部から安宅地区で初めて遺構が確認されたため、地形をもとに包蔵地の範囲を確定し、福岡県教育委員会に申請を行った。そして、11月1日付で周知の包蔵地として認定された後、川崎町事業課と教育委員会で協議を重ね、工事により遺跡が破壊される約200㎡を対象に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は令和2年1月7日から重機による掘削を開始し、14日から17日にかけて人力による遺構の掘削を行い、最終日にドローンを使用した空中写真撮影を実施した。その後、工事が始まるまでの安全を確保するため重機による埋戻しを行い、20日に現場での作業が終了した。

現場での発掘調査後、すぐに整理作業を実施すべきところであるが、別の発掘調査が控えていたため整理作業は2ヶ年度に分けて実施することにし、令和元年度は文化財整理事務所において遺物の洗浄及びナンバリングまでを実施した。その後、令和2年度になって遺物の実測や写真撮影等を実施し、令和3年3月31日に全ての作業が終了した。

調査組織は以下のとおりである。

調査体制（令和元年度 発掘調査当時）

【事務組織】

教育長	小 峠	英 人
社会教育課長	中 村	久美子
社会教育係長	野 相	巧 美
主任主事	末 吉	隆 弥（調査担当）
主事	永 末	夏 菜（調査担当）

【調査組織】

調査員 末 吉 隆 弥 / 永 末 夏 菜
発掘調査従事者 衛藤 直實、堀江 達男、春本 篤、八隅 定雄、堀川 幸敏、
奥 紀美子、伊吹 勲、岩下 辰美、大塚 義美（順不同、敬称略）
整理作業従事者 衛藤 直實、奥 紀美子（順不同、敬称略）

調査体制（令和2年度 整理作業当時）

【事務組織】

教育長 小 峠 英 人
社会教育課長 中 村 久美子
社会教育係長 末 吉 隆 弥（調査担当）
主事 永 末 夏 菜（調査担当）

【調査組織】

調査員 末 吉 隆 弥 / 永 末 夏 菜
整理作業従事者 奥 紀美子（敬称略）

なお、調査にあたり安宅地区の行春寺様並びに周辺住民の皆様には大変お世話になりました。
記して感謝申し上げます。

第 2 節 位置と環境

【地理的環境】

安宅イバノ本遺跡は福岡県田川郡川崎町大字安真木の安宅地区に位置する。

川崎町は福岡県の中央内陸部の東寄りにある田川郡の南西部に位置し、その重心は北緯 33° 34′ 02″、東経 130° 49′ 01″である。北は田川市と接し、東は大任町、同じく東から南にかけては添田町、西は嘉麻市と接している。川崎町の南北の距離は 12.572km、東西は 4.945kmで、その面積は 36.14km²である。

川崎町の変遷をみると、現在の川崎町域は明治から昭和にかけての合併、編入を経て形成されたものである。明治 20 年 4 月に安宅、上真崎、下真崎、黒木、荒平、木城の 6 ヶ村が合併し安真木村に、東川崎と西川崎両村が合併し川崎村となる。更に、同 21 年の市制町村制の施行により同 22 年に川崎村が田原と池尻両村を編入する。その後、50 年間は川崎村と安真木村がそれぞれ独立した行政として存続するが、昭和 12 年 4 月に安真木村が川崎村に編入され、翌 13 年に町制を施行し現在の川崎町が誕生した。

自然環境をみると、川崎町の地形は町のほぼ中央を南から北へ遠賀川水系の中元寺川が流れており、この川の浸食による盆地と数多くの粗野地を形成している。このため、他の地域へ移動する際は必ず峠を越えねばならず、明治 32 年に鉄道が開通するまでは遠賀川水系を利用した水運が盛んに用いられていた。現在の自動車社会においては道路網の整備が進み新たな国道バイパスが完備されつつあり、福岡市や北九州市等の主要都市まで約 1 時間で移動できるようになった。ちなみに町内最高峰の戸谷ヶ岳（標高 712.4m）と池尻三ヶ瀬地区との標高差は 677m もあり、およそ 4.4℃の気温差がある。

川崎町の地質は大きく 2 つに分けることができる。中元寺川の上流にあたる南部には硬く良質な朝倉花崗閃緑岩と、比較的脆い真崎花崗岩という 2 つの花崗岩層が広範囲に分布しており、これらは放射性元素を用いた年代測定によって約 1 億年前の中世代白亜紀に形成されたことが判明している。これに対し、中元寺川の下流にあたる北部には、約 4,000 万年前から 3,500 万年前までの間に堆積した大量の石炭を含有する古第三紀層が広がっている。これは直方層群と呼ばれ、筑豊地域全体に分布しており、かつての筑豊炭田の主要な炭層を多く含んでいた。石炭は石油が重要視されるまでは国のエネルギー政策の基幹産業として地域経済と日本国の近代化を支えていた。川崎町内での採炭開始については明確な資料が残っていないので断言はできないが、17 世紀には瀬戸内地方で行われる製塩のための燃料として輸出された記録がある。その後、明治時代になると沢山の地場炭鉱が開鉱するだけでなく三井、古河等の大企業も経営に乗り出し、最盛期には 120 鉱以上の炭鉱が乱立し、炭の都「炭都川崎」として大いに栄え、人口も昭和 33 年に最大で 43,102 人を数えた。特に翌 34 年の川崎小学校では総児童数 3,890 人を数え、福岡県内で最大規模の学校となり、次々と分校が誕生した。しかし、エネルギー革命で石炭需要が激減するに伴い町内の炭鉱も次々と閉山し、昭和 46 年の豊前炭鉱の閉山をもって町内の炭鉱は全て閉山した。

石炭産業が終息した現在、川崎町の基幹産業は炭鉱時代以前の農業に戻っている。特に、近年までは主要農産物である「米」が生産調整されていたため、イチゴや巨峰を中心とした果樹栽培が盛んになっている。また、昭和 50 年代後半から開始された国道バイパス網が完備され、交通の利便性を活かした商工業が少しずつであるが発展を始めている。

また、国指定名勝「藤江氏魚楽園」をはじめ県指定や町指定の各文化財、更には近代化産業遺産を活かした文化のまちづくりや「かわさきパン博」等様々な観光イベントを展開するとともに、子ども達の学力向上や地域拠点プロジェクト及び健幸都市をめざした様々な取り組みを実施し、町の活性化に力を入れ続けている。

【歴史的環境】

歴史環境に目を向けると、前述したように川崎町は英彦山山系に連なる山間部を蛇行しながら流れる中元寺川の浸食によって形成された粗野地であり、遠賀川水系の造り上げた肥沃な田川盆地には古くから人々が暮らしていた痕跡が数多く残る地域である。しかし、田川地域で旧石器時代の遺物が出土した例は極めて少なく、その起源を想像するのも難しい。本町でもこれまでの発掘調査で旧石器時代のものと判明した遺跡は確認されていないものの、田原地区にある「田原遺跡^{註1}」や安真木地区にある「木城遺跡群^{註2}」から当時代の石器や剥片を採取しており、太古のこの地に人類が生活していた確かな証拠といえる。

縄文時代に入ると、「木城遺跡群」等の遺跡から早前期の土器や石器が出土しているが、英彦山に連なる山間部の一部に限られる。町内における当時代の明確な遺構はそのほとんどが後晩期のものであり、町内各地の遺跡から少数ながら遺物とともに遺構が検出されている。縄文時代が主体の遺跡はこれまで確認されていないため詳細を述べることはできないが、前期頃に山間部で狩猟採取を生業に生活していた人々が、後晩期には平野部へ生活拠点を移していく過程を窺い知ることができる。

弥生時代については前期の遺跡数は極端に少なく、これまで発掘調査等学術的な調査は実施されていない。遺物の出土例も少なく、詳細は不明な点が多い。

中期になると、中元寺川の両岸を中心に町内全域にまんべんなく遺跡が分布するようになる。おそらく水稻耕作が可能な場所をもとめ、他地域からの移住が進んだためと考えられる。この時期は水稻耕作も定着し人口も激増、各地にムラが形成された。更に階級社会の萌芽が窺える時期であり、その後現在まで続く農村地帯としての原型が造られたことが容易に推測できる。

後期になると新しいムラの形成はあまり見られなくなるものの、建築技法に掘立柱建物の新技法が登場する。また、祭祀系の遺物が多数出土するようになり、シャーマンや族長を中心とした集団社会の確立を窺い知ることができるようになる。特に、田原地区に所在する「田原遺跡」は町内だけでなく田川市郡内でも最大級の遺跡であり、階級社会の発展によりムラ同士が連合しクニへと発展していく時代の変遷を窺い知ることができる貴重な遺跡である。

古墳時代に入ると町内にも安真木地区に町指定史跡である「戸山原古墳 1 号墳^{註3}」を中心とする「戸山原古墳群」をはじめ「木城古墳、宮前古墳、朝倉古墳群^{註4}」が、田原地区に「中田原古墳群、西田原古墳群、石橋池西古墳群、鎮西原古墳群、岩鼻古墳^{註5}」等数多くの高塚を有する古墳が造られたが、炭鉱時代の乱開発によりそのほとんどが破壊されてしまった。また、石棺墓群のほか田川地方を含む北部九州から派生した横穴墓群も多数存在するが、植林や無秩序な乱開発により破壊が著しい。この時代はそれぞれの地区に拠点となるムラが形成されるとともに、ムラ同士

の結びつきや特権階級の登場により社会の組織化が進み、クニが国家へと発展する過程を窺い知ることができる。

ムラでの生活様式は弥生時代とさほど変わらないようだが、本町でも6世紀も後半に入ると一端にカマドを有する竪穴住居が散見されるようになる。また、出土遺物に須恵器が登場するようになる。6世紀代の須恵器窯跡は田川地方で未だ確認されておらず供給元については今後検証する必要があるが、7世紀に入ると町内に「号四郎窯^{註6}」が開窯したことが解っている。当窯跡は現在墓地となっており、破壊が著しいうえ学術的な調査が行われていないため詳細は不明だが、資料採取は可能なため、今後は窯本体の様相や生産された須恵器の流通について検証する必要がある。

古代に入ると、川崎町も天皇を中心とした中央集権国家に組み込まれていく。この時代、農政の大改革として条里制が施行されるが、川崎町内にも文献資料に記述のある地名として北から「池尻別符」、「田原荘」、「田原新荘」、「河崎荘」、「虫生別符」の5ヶ所が登場する。これら条里制を伴う水田は本来大宰府領として整備されたものだが、10世紀には全て宇佐神宮及び関係寺社の荘園として寄進されている。ここで特筆すべきは、川崎町内には当時絶大な勢力を誇った彦山の所領や荘園が無いことである。これは、川崎町が彦山への最前線として大宰府からも重要視されていた表れであり、後にこれら荘園は寺社間だけでなく、一部貴族や在地領主との争いの原因ともなる。

九州は平家との結びつきが強い地域だが、田川地方をはじめ豊前地域は豊後国に下向した源為朝の支配下にあった。川崎町は地理的に豊前国と筑前国の境に位置するため度重なる争乱に巻き込まれ、国境沿いの山間部に防衛のため山城が配されるようになった。町内は度重なる戦災を受けるが、この時期田原遺跡で鉄生産が開始されており、農業だけでなく工業都市として発展する礎が築かれた時代でもある。

中世は在地領主が武士化する時代である。前述したように源氏の支配下にあった豊前国に対し平氏側は豊前国と筑前国の境に位置した川崎町を大宰府防衛の最前線と考え、「龍円城^{註7}」や「城山城（勝山城）」^{註8}等幾つかの山城を築城している。この後、川崎町は元寇、南北朝争乱、戦国期の下克上の動乱に巻き込まれ続け、度々豊前国や筑前国に編入されることとなり、独自の文化圏を形成していくことになる。

この時代、町内では農業基盤が拡充するが、それ以上に工業が盛んになる特徴がある。中元寺川からは良質な砂鉄が採れることもあり、「田原遺跡」及びその周辺で製鉄業と鉄器生産が行われていたことが確認されている。更に、東川崎地区にある「七反坪遺跡^{註9}」からは土師器が大量生産されたことが判明しており、川崎町は工業都市として繁栄したことが出土遺物から窺える。しかし、応仁の乱に始まる戦国期になると、大友氏と毛利氏の争乱、秋月氏の侵攻等により町内は幾多の戦乱に巻き込まれ荒廃する時期もあるが、画聖「雪舟」が安真木地区の荒平へ来訪した際築庭したと云われている国指定名勝「藤江氏魚樂園」が造られるなど、文化面では発展を極めていった時代である。

近世は田川地区にとって動乱の時代である。中世末期に秋月領となった川崎町は豊臣秀吉の九州出兵で戦場となり、国境付近に点在した山城は前述した藤江氏魚樂園のある荒平城を除き全て落城した。この合戦により町内は焼け野原になったと云われている。その後、徳川家による江戸幕府が開かれると田川地区は細川藩の所領となる。この時代に年貢台帳と人畜改帳が完備され、明治維新までの農村基盤が完成した。

寛永9年（1632年）、肥後の加藤家が改易となり、細川氏が転封となった。替わりに豊前国へ封入したのが九州唯一の譜代大名である小笠原氏である。この小笠原藩の治世下で米の増産政策として数多くの井堰や溜池が整備され、当初の15万石から18万石に増石されるが、増産のための各種事業に係る負担は農民に押し付けられただけでなく、小倉枿という不正枿により本来より多く年貢を取りたてられた農村は荒廃し、数多くの無主田を生み出す原因となった。

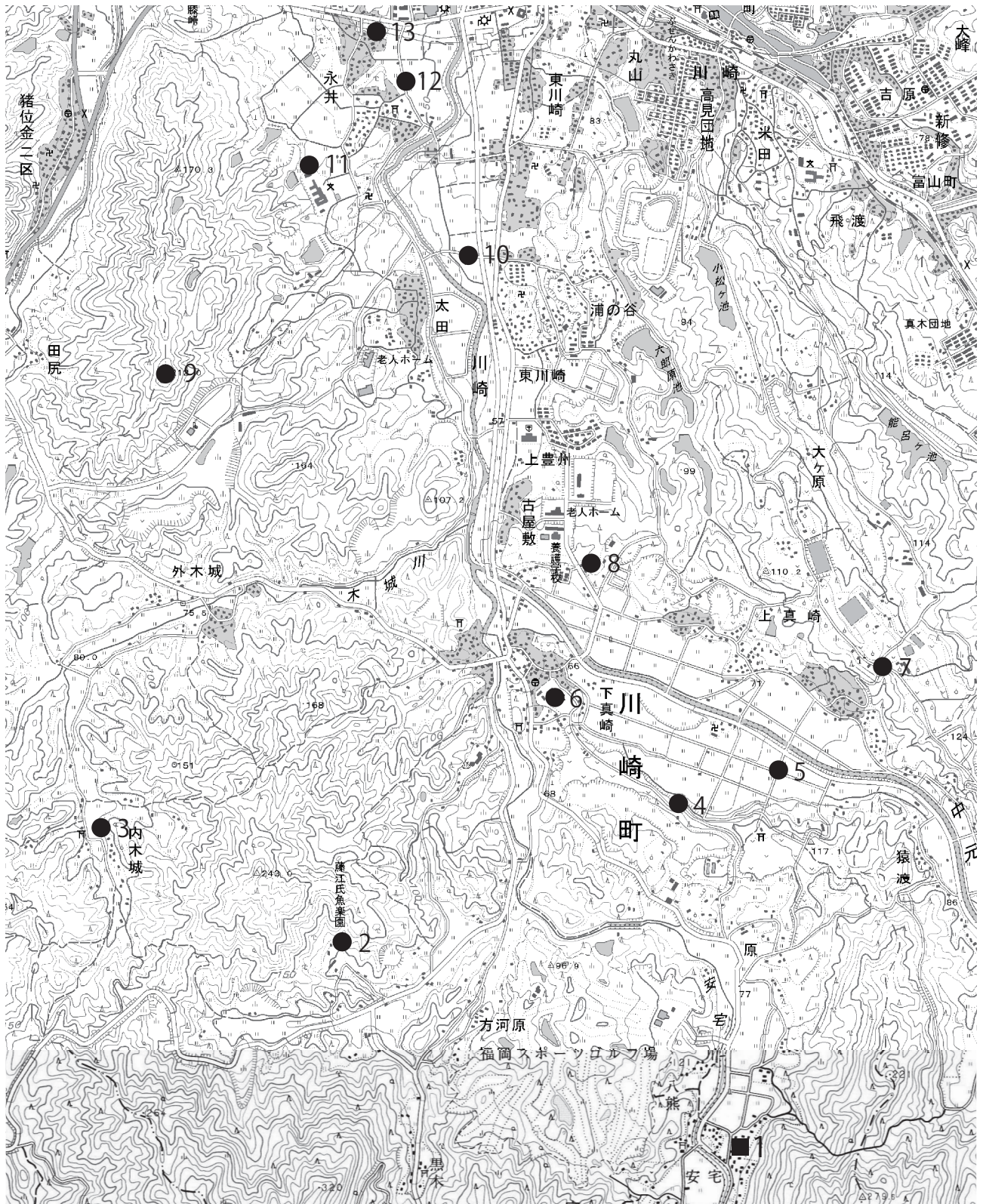
農業とは対照的に工業では新たに樫蠟の生産が開始され、藩の貴重な財源となった。鉄の生産は中世から引き続き行われているが、幕末に石炭の採掘が始まると軽工業は一気に衰退し鉱業が中心となり、やがて前述したように明治の近代化を支えた筑豊炭田の中心地として繁栄していった。

この時代、町内のほとんどの寺院が天台宗から一向宗（現在の浄土真宗）へ改宗しており、農民に対し仏教思想が根付いただけでなく、村の楽しみとして盆供養も定着し、口説きを基調とした地域ごとの特色をもった盆踊りが現在まで受け継がれている。また、五穀豊穰や悪霊退散のため神幸祭や祇園祭など、村中で行う祭りが数多く始まった。更に、ハレの日に祓いのため奉納されるしし舞が根付き、川崎町の民俗芸能が確立された時代といえる。

註1：『田原遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第15集	川崎町教育委員会	2015
註2：『木城遺跡群』	「川崎町文化財調査報告書」第16集	川崎町教育委員会	2016
註3：『戸山原古墳』	「川崎町文化財報告書」第8集	川崎町教育委員会	2010
註4：『宮前遺跡群』	「川崎町文化財調査報告書」第10集	川崎町教育委員会	2012
註5：『冥加塚遺跡』	「福岡県文化財調査報告書」第77集	福岡県教育委員会	1987
註6：『永井遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第1集	川崎町教育委員会	1985
註7：『籠円城跡』	「川崎町文化財調査報告書」第11集	川崎町教育委員会	2013
註8：『城山城跡』	「川崎町文化財調査報告書」第19集	川崎町教育委員会	2019
註9：『七反坪遺跡』	「川崎町文化財報告書」第4集	川崎町教育委員会	1994

参考文献

『川崎町史』		川崎町	2001
『われらの川崎』	「郷土読本」	川崎町	1969
『郷土の「むら」の形成と発展』	「川崎町部落解放史」	川崎町教育委員会	2004
『冥加塚遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第2集	川崎町教育委員会	1985
『公門原遺跡・真崎遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第3集	川崎町教育委員会	1993
『田原A条里遺跡』	「川崎町文化財報告書」第3集	川崎町教育委員会	1995
『西川崎遺跡・鎮西原遺跡』	「川崎町文化財報告書」第7集	川崎町教育委員会	2009
『川崎塚田遺跡・川崎ヤシキ前遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第9集	川崎町教育委員会	2011
『三ヶ瀬遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第13集	川崎町教育委員会	2014
『田原遺跡7次調査』	「川崎町文化財調査報告書」第18集	川崎町教育委員会	2017



第1図 安宅イバノ本遺跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | |
|----------------|----------|----------|----------|
| 1 安宅イバノ本遺跡 | 2 藤江氏魚樂園 | 3 木城遺跡群 | 4 戸山原古墳群 |
| 5 宮前遺跡群 | 6 真崎遺跡 | 7 上真崎遺跡 | 8 朝倉古墳群 |
| 9 城山城跡 | 10 七反坪遺跡 | 11 永井遺跡群 | |
| 12 川崎塚田・ヤシキ前遺跡 | 13 西川崎遺跡 | | |

第2章 調査の概要

第1節 調査の概要

安宅イバノ本遺跡は、川崎町大字安真木字イバノ本に所在し、古くから安宅という地名で呼ばれている。安宅地区は川崎町の南端部に位置しており、地区を南から北へ流れる安宅川が造った狭小な扇状地以外は英彦山に連なる山々に囲まれた典型的な山間部集落で、扇状地以外は斜面に棚田を造ることで水稲耕作が行われている。

地名は古代山岳仏教に由来しており、詳細な時代は解らないが南側の山間部に古代山岳寺院である曼荼羅寺が有り、その中で安宅教と曼荼羅教の2つの教派があったと云う。一時、両派の争いが激しくなり、劣勢になった安宅教派の僧侶は曼荼羅寺を去り奈良へ戻ることになるが、この時、再びこの地に安宅教を広めるため必ず戻るとの誓いをたて、経典を埋納したという。この故事から当地を安宅と呼ぶようになったとか、奈良へ帰る安宅教徒を曼荼羅教徒がこの地で惨殺し、不憫に思った村人が手厚く葬るとともに、彼らのことを忘れないように地名を安宅と名付けたなどの伝承が残っている。伝承の信ぴょう性は定かでないが、少なくとも古代には既に安宅の地名が使われていたようで、町内で最も古い地域といえる。

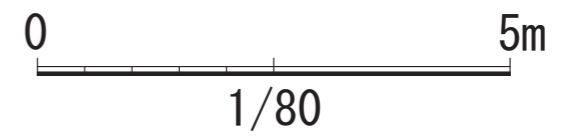
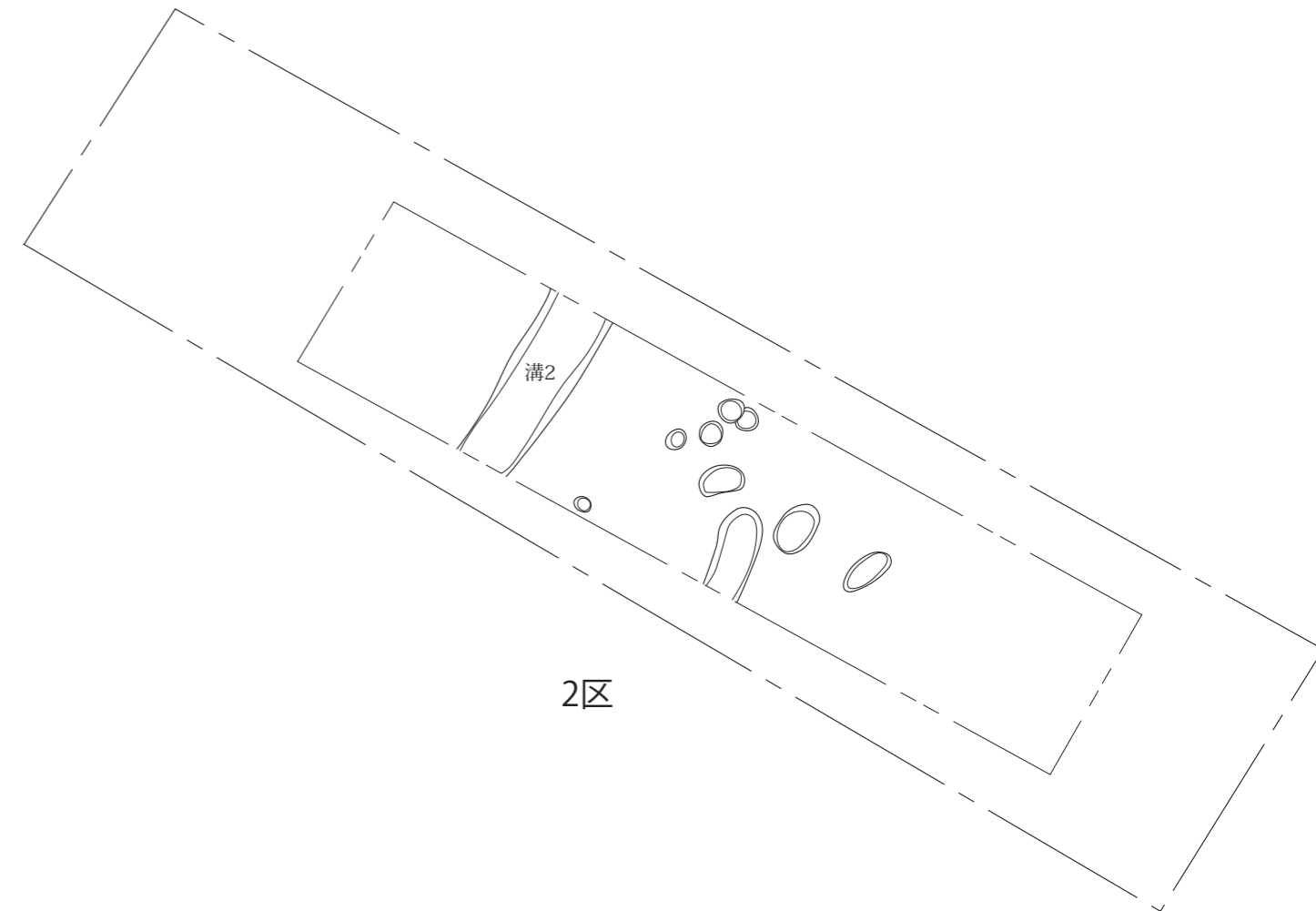
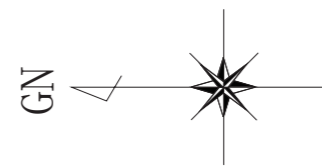
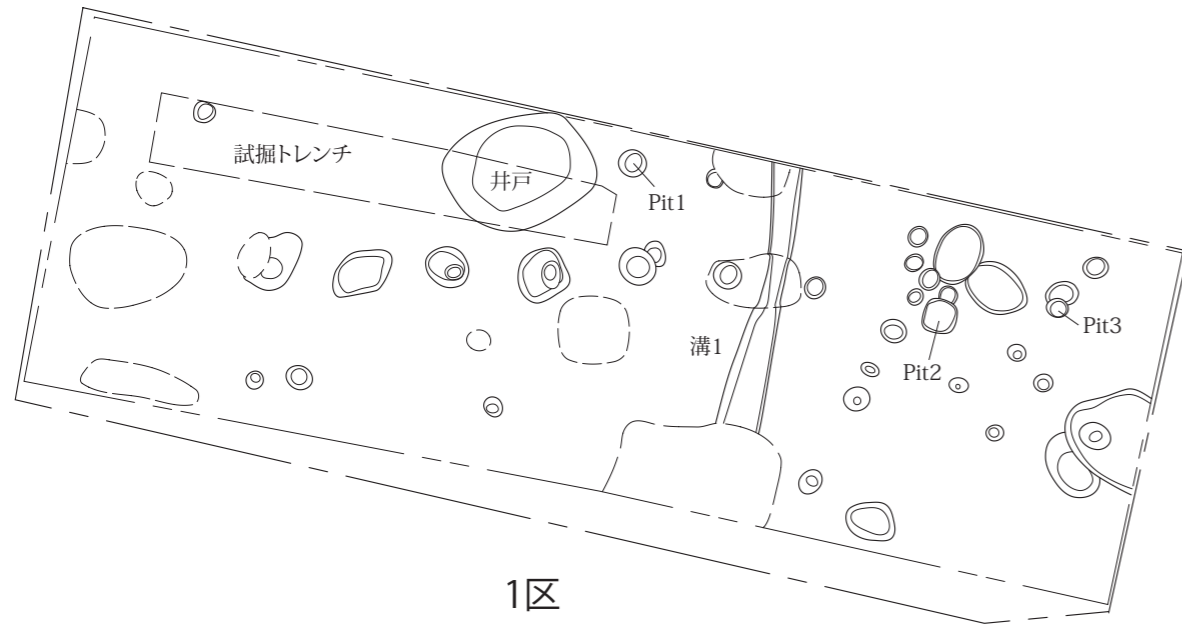
地質的に安宅地区は真崎花崗岩帯に位置するため、筑豊地区では珍しく石炭層を含有していない。このため、炭鉱と無縁であり、古くからの伝統や街並みが色濃く残る地域である。しかし、これまで数多くの開発に伴う事前調査において遺跡が確認されたことはなく、周知の包蔵地も設定されていなかった。この原因として、慶長年間の天候不良による通称「安宅崩し」と云われる大災害が挙げられる。この時の大雨が原因で安宅地区は未曾有の大洪水や土石流に見舞われ、村の形状が大きく変化したと云われている。このため、遺跡も破壊されてしまったと推測されていた。

今回調査した地区は、安宅地区唯一の寺院である行春寺の麓に位置し、安宅地区ではかなり立地条件の良い場所である。このため、古くから集落の中心部として発展してきたようだが、昔ながらの家々が乱立しているため道路幅が狭く、車が往来できない等様々な問題が生じていた。このため、地元の要望に応じ川崎町が町道整備を実施することになった訳だが、その後の経緯は第1章第1節で述べたとおりである。

今回の調査は、事前の試掘調査で遺構が確認された箇所について記録保存を目的として実施した緊急の埋蔵文化財発掘調査である。道路計画幅が4mと狭く細長い現場となったため全体の解明には至らなかったが、安宅地区で初めて実施された発掘調査であり、その成果は計り知れない貴重なものとなった。

なお、調査区の中央を東から西へ流れる自然流水路が存在する。この水は生活用水として使用されており断水することができなかつたため、当水路を南北に挟む形で調査区を設定した。

以下、調査区ごとに主要遺構及び出土遺物を紹介する。



■ 1区（第2図／図版3・4）

自然流水路を挟んで北側に設定した調査区で、東西長4.2m、南北長11.9m、標高約90mを測る。現在は更地となっているが元々格式ある屋敷が建っていたようで、聞き取り調査から近代以前に建てられたものと推測される。後世のカクランにより破壊を受けているものの、調査区のほぼ全面から土壌やピットが検出された。

以下、主要遺構を紹介する。

●井戸（第2図／図版5）

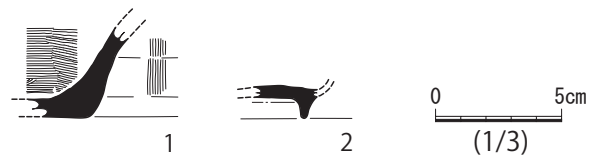
調査区のほぼ中央部の東側付近で検出され、主軸をほぼ真北に取り、東西長1.2m、南北長1.62mを測るほぼ円形のものである。検出時は地山との境が不明瞭であり試掘調査時に推測した縄文時代の土壌であることも視野に入れ調査を実施したが、掘削開始直後から様々な時代の遺物が出土するとともに0.5m大の石が相当数出土した。約0.6m掘削した段階で土に水気を含むようになった。ピンポールを刺しても未だ掘削することが可能と判断されたが、泥濘となり掘削が困難になったうえ若干の湧水が確認されたため、これ以上の掘削は危険と判断し調査を中断した。石は自然の形をそのまま利用したものから多少の加工が加えられたもの等様々で、井戸の石積に使用されていたものの残骸であると推測される。時代については、前述した屋敷が建てられる以前に使用されていたと考えられ、出土遺物等から近世のものとも推測される。

【出土遺物】（第3図～第7図／図版6～8）

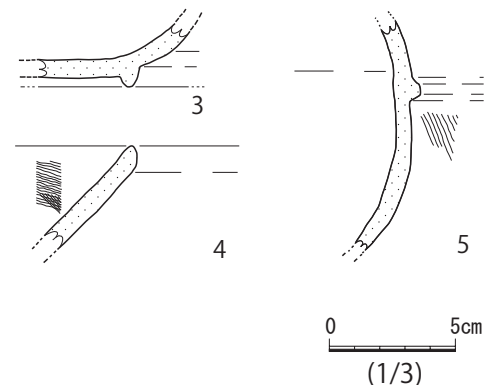
遺構編で述べたとおり、掘削開始直後から様々な遺物が出土しており、その内訳は須恵器3点、土師器9点、瓦器5点、陶磁器5点及び石器類2点である。全て混ざり込みであり遺構に伴うものではないと判断される。以下、主要な遺物のみ紹介する。

1及び2は須恵器である。1は残存器高3.7cmを測る鉢の底部片である。外面にタテ方向へのハケ目を施し、内面にヨコ方向へのクシ目を全面に施していることからすり鉢と推測される。9世紀のものと考えられる。2は脚高0.7cmを測る脚付坏身片である。外面は回転ヨコナデを、内面は指による不定方向ナデで調整している。9世紀のものと考えられる。

3から5は瓦器である。3は推定で底径6.6cmを測る碗の底部片である。外面体部はケズリを、内面はナデで調整しているようだが、全体的に摩耗著しい。高台はケズリ出しで成形されており、丸みを帯びた三角形状である。12世紀後半から13世紀初頭にかけてのものと考えられる。4は鉢の口縁部片である。外方向斜めにほぼ直線的に伸びる形状を有しており、口縁端部は外面を玉縁状に模して鋭角に内弯させている。外面はミガキを施しているようだが、摩耗著しく不明瞭である。内



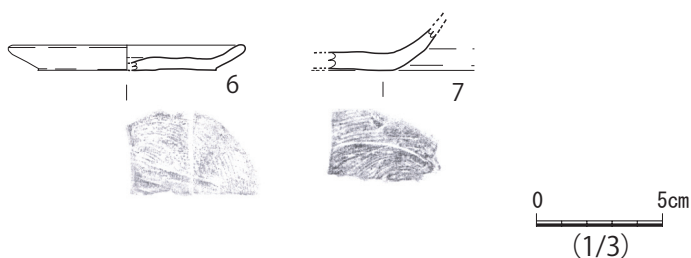
第3図 井戸出土須恵器実測図（1/3）



第4図 井戸出土瓦器実測図（1/3）

面は口縁部以外に横方向へのハケ目が見て取れる。中世のものと考えられる。5は土鍋片である。外面の胴部中央部よりやや上段に突帯のような張出部を有し、全体にナデ調整を施し整形している。外面全体に炭が付着している。中世のものと考えられる。

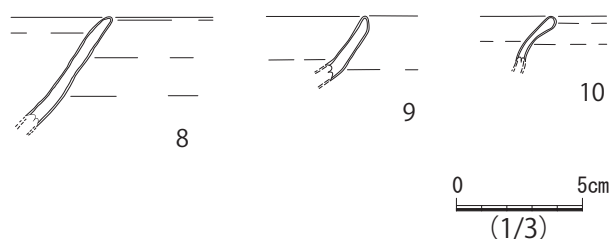
6と7は土師器である。6は残存1/4で復元口径9.0cm、復元底径7.0cm、器高1.0cmを測る小皿片である。底部は回転糸切りで成形し、乾燥時の板状圧痕が残る。口縁部はツマミヨコナデを、内面は不定方向ナデを施す。残存していないため断言できないが、内面中央部に向け窪みらしき傾斜が見られるため、へそ皿の可能性もある。中世のものと考えられる。



第5図 井戸出土土師器実測図(1/3)

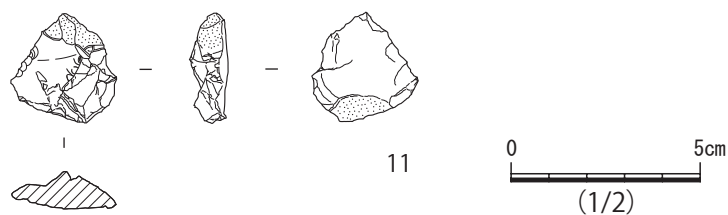
7は皿の破片である。底部は糸切りで成形し、外面はヨコナデを、内面は不定方向ナデを施す。中世のものと考えられる。

8から10は陶磁器である。8は青磁碗の破片である。全面に施釉を施し、全体に細かな貫入が入る。龍泉窯の系譜で、12世紀前半のものと考えられる。9は陶器の碗の口縁部片である。体部中央で内側に屈曲し、緩やかに内弯する口縁を有する。全面に斑状模様の施釉を施す。近世のものと考えられる。10は陶器の口縁部片である。体部は一度内側に屈曲した後、外反する口縁部を有する。口縁端部の外側は若干玉縁状の膨らみが認められる。全面に施釉を施す。大きさや形状から猪口と推測される。近世のものと考えられる。



第6図 井戸出土陶磁器実測図(1/3)

11は長さ3.0cm、幅2.8cm、厚み1.0cmを測る硬質頁岩の破片である。加工や使用された痕跡は見られないことから剥片と推測される。混ざり込みのため詳細な時期は不明である。



第7図 井戸出土石器実測図(1/2)

●溝1(第2図/図版3・4)

調査区中央部よりやや南側で検出され、N-80°-Wに主軸を取り、検出長2.8m、最大幅0.44m、深さ0.47mを測る溝である。東側は調査区に、西側はカクランに阻まれており全容を把握することはできなかったが、地形に沿ってほぼ東西方向へ直線的に掘られ、幅が狭く水が流れた痕跡が確認されなかったため区画用として使用された溝の可能性はある。出土遺物は瓦器片が1点のみのため詳細な時代は不明であるが、他の遺構にカクランされる状況と埋土の状態から中世以前の遺構である可能性も示唆される。

●P i t 1 (第 2 図／図版 3・4)

井戸のすぐ南側から検出された直径 0.28 m、深さ 0.1 mを測る円形のピットである。掘立柱建物等のプランは確認できなかったが、底部から 8 世紀後半のものと考えられる須恵器の破片が 1 点出土した。しかし、時代を決定する資料に乏しく、詳細は不明である。

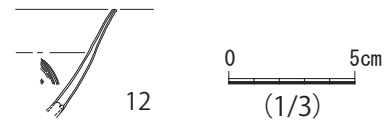
●P i t 2 (第 2 図／図版 3・4)

溝 1 より南に 1.7 m の位置から検出され、N - 75° - W に主軸を取り、直径 0.36 m、深さ 0.08 m を測る隅丸方形のピットである。残存状況が悪く、掘立柱建物等のプランも確認できなかったが、他の円形のピットよりしっかりした造りである。形状と出土遺物から中世の柱穴跡とも推測されたが、資料が少なく時代の特定には至らなかった。

【出土遺物】(第 8 図／図版 8)

当ピットからは中国製の輸入白磁と近世磁器が 1 点ずつ出土した。

12 は輸入白磁の体部片である。緩やかに内弯しながら外上方へ延びる体部を有し、口縁端部を鋭く外反させている。内面に口縁端部より 2.0cm の位置に一条の沈線を施文し、沈線より下部にクシ目による花紋を施す。内外面ともに飴色の釉薬を施す。14 世紀後半のものとして推測するが、破片のみの出土のため詳細は良く解らなかった。



第 8 図 P i t 2 出土白磁実測図 (1/3)

●P i t 3 (第 2 図／図版 3・4)

P i t 2 より南に 1.2 m の位置から検出され、直径 0.24 m、深さ 0.08 m を測る円形のピットである。掘立柱建物等のプランは確認できなかった。残存状態も悪く時代等詳細は不明であるが、白磁片が 1 点出土した。

【出土遺物】(図版 7)

13 は白磁の底部片である。高台部分及び口縁部は欠損し詳しい形状は不明である。内面見込み部に沈線状の段を有し、底部と体部それぞれに花紋と思われる櫛目紋を施す。13 世紀のものとして推測するが、破片のみのため詳細は良く解らなかった。

この他の土壌やピットについても調査区が狭小なため建物等の明確なプランを確認することはできず、出土遺物が無かったため詳細は不明であるが、近世以降に当地にあった屋敷跡や、それ以前の集落跡の一部と考えられる。

■ 2 区 (第 2 図／図版 3・4)

自然流水路を挟んで南側に設定した調査区で、N - 30° - E 方向に東西長 2.2 m、南北長 9.2 m、標高約 89 m を測る。現状は畑地であるが、度重なる災害等で土砂が流れ込んでおり、現状地表より約 1.5 m 掘り下げた場所から溝や土壌及びピット等の遺構が検出されたが、遺物は一切出土しなかった。また、検出の段階から常時ポンプアップが必要なほどの激しい湧水が発生し、難しい調査を強いられたことが悔やまれる。

以下、主要遺構を紹介する。

●溝 2 (第 2 図／図版 3)

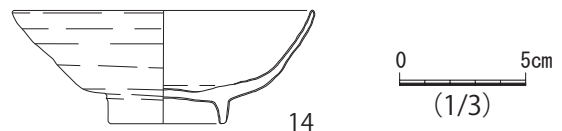
調査区中央部よりやや北側から検出され、N-60°-Wに主軸をとり、検出長 2.16 m、最大幅 0.84 m、深さ 0.29 mを測る溝である。東西両端を調査区に阻まれ全容を把握することはできなかった。地形に沿った緩やかな傾斜を有するため水が流れていた可能性を考えたが、土層が単層で根拠が見つからず、掘削以前からの激しい湧水に悩まされ詳しい調査ができず、詳しいことを解明することができなかった。出土遺物が無かったため、時期等詳細は不明である。

この他に土壌やピットが少数検出されたが、調査区が狭小なため建物等のプランは確認できなかった。また、当調査区からは発掘調査で遺物が 1 点も出土しなかったため時期を含め詳しい解明につなげることができなかったが、試掘調査で確認した数少ない遺物から古代から中世にかけての集落跡の一部であると推測される。

■表採資料 (第 9 図／図版 8)

今回の調査で表採したものやトレンチから出土した遺物は須恵器 1 点、土師器 1 点、近世陶器 4 点及び近世磁器 1 点を数える。そのうち、参考になり得るもののみを紹介する。

14 は残存 1/2 で復元口径 10.8cm、底径 4.6 cm、器高 4.5cmを測る陶器の壺である。底部にケズリ出しの高台を有し、体部は緩やかに内弯しながら立ち上がり、口縁端部を丸く収めている。外面は壺付部以外全面に乳白色の釉薬を施釉し、内面は薄く乳白色の釉薬を施釉した後、見込み部分を釉欠きしている。近世のものと考えられる。



第 9 図 表採土器実測図 (1/3)

第2節 出土遺物観察表

報告No.	区	遺構	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			色調	胎土・石材	焼成	備考	挿図番号	図版番号
						口径	底径	器高	口縁部	体外面	体内面						
1	1	井戸	須恵器	鉢	底部片	-	-	-	-	縦方向ハケ目 ヨコナデ 不定方向ナデ	横方向クシ目 不定方向ナデ	外: 暗灰褐色 内: 淡灰白褐色	細かな石英含むもしまり良い	良好		3	6
2	1	井戸	須恵器	脚付坏身	底部片	-	-	-	-	回転ヨコナデ ツマミ 回転ヘラ切り	不定方向ナデ	外: 暗灰黒褐色 内: 暗灰白褐色	一部金雲母含み荒い部分もあるが全体的にキメ細かい	良好	脚高: 0.7cm	3	6
3	1	井戸	瓦器	埴	底部片	-	-	6.6 (推定)	-	ヘラ削り後 ヨコナデ ツマミ ヨコナデ 不定方向ナデ ケズリ(不明瞭)	不定方向ナデ ヨコナデ	外: 淡乳白色 内: 淡灰乳白色	細かな気泡痕あるもキメ細かい	良好	高台にケズリ出し	4	6
4	1	井戸	瓦器	鉢	口縁部片	-	-	-	ヨコナデ	ミガキ(不明瞭)	横方向ハケ目	暗灰黒褐色	しまり良いが、荒く石英、金雲母含む	良好		4	6
5	1	井戸	瓦器	土鍋	片	-	-	-	-	ヨコナデ ヨコナデ後 一部ハケ目	ヨコナデ ミガキ後 ヨコナデ	外: 黒色 内: 淡灰黒褐色	しまり良くキメ細かい	良好	外面全体に炭の付着有	4	6
6	1	井戸	土師器	小皿	1/4	(9.0)	(7.0)	1.0	ツマミ ヨコナデ	回転系切り	不定方向ナデ	淡黄赤白色	石英微量に含み、一部に空気泡が見られる	良好	内面中央部に窪み有(へそ皿か) 底部に板状圧痕有	5	6
7	1	井戸	土師器	皿	底部片	-	-	-	-	ヨコナデ 系切り	ヨコナデ ヨコナデ後 不定方向ナデ 不定方向ナデ	淡赤乳白色	しまり良くキメ細かい	良好		5	7
8	1	井戸	青磁	碗	口縁部片	-	-	-	施釉	-	-	暗緑茶色	しまり良くキメ細かい	良好	龍泉窯系 全体に細かな貫入有	6	7
9	1	井戸	陶磁器	碗	口縁部片	-	-	-	施釉	-	-	暗黄緑色	しまり良くキメ細かい	良好	近世	6	7
10	1	井戸	陶磁器	猪口	口縁部片	-	-	-	施釉	-	-	暗緑茶褐色	しまり良いがキメやや荒い	良好	近世	6	7
11	1	井戸	石器	砕片	片	長さ (最長) 3.0	幅 (最長) 2.8	厚さ 1.0	-	-	-	-	硬質頁岩	-		7	8
12	1	Pit2	白磁	碗	口縁部片	-	-	-	施釉	-	-	淡白緑色	しまり良くキメ細かい	良好	口縁より内面2.0(高さ1.8)cmに 一条の沈線を施文 沈線下に櫛目による花紋を施す	8	8
13	1	Pit3	白磁	碗	底部片	-	-	-	施釉	-	-	淡乳灰白色	しまり良くキメ細かい	良好	内面見込に沈線状の段を有する 内面底部と体部に櫛目紋を施す (花紋か)	-	7
14	-	表探	陶磁器	碗	1/2	(10.8)	4.6	4.5	施釉	施釉	施釉 回転ヨコナデ	器(体)色: 明黄土色 釉色: 乳白色	しまり良くキメ細かい	良好	近世 内面見込部分と外面蓋付部分に 釉欠き有	9	8

※法量欄内()は復元径



挿入図版 1 安宅イバノ本遺跡発掘調査作業従事者

第3章 総括

今回の調査は町道の新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。道路幅に沿った調査のため幅が4m程度と狭く細長い調査区となってしまった。また、調査面積も約200㎡と狭小のため詳細な資料が採取できたとはい難いが、最後に今回の調査結果を簡単な考察を交えながらまとめた。

安宅地区は第2章で述べたとおり、英彦山に連なる山々に囲まれた谷部に存在する典型的な山間部集落である。数少ない文献資料や言い伝え等によるとその歴史は古く、古代には既に集落が存在していたことが確認できる。特に江戸時代には町内でも規模の大きな村として絵図にも記載されており、現在まで長期に渡り集落が営まれてきたことは明確である。また、地質的に石炭を含有しないため炭鉱とも無縁であり、古くからの伝統や街並みが色濃く残っているにもかかわらず、これまで遺跡が確認されたことがなかった。これは、度重なる災害が原因と考えられ、特に慶長年間の天候不良時に発生した通称「安宅崩し」と呼ばれる大災害は、安宅地区の地形を大きく変化させたと言われている。この災害で安宅の氏神である戸山神社から獅子頭が流出し、直方市感田に流れ着いたという。現在この地には阿高神社が建立されており、当時の災害の大きさを伝えている。これらの災害等が原因で安宅地区には既に遺跡は残っていないと考えられていたが、前述したとおり今回初めて遺跡が確認され発掘調査を実施した次第である。

今回の調査では、北側の1区からは井戸や溝のほか、多数の土壌やピット等が検出された。当地には昭和時代まで安宅地区で格式のある屋敷があったそうで、当屋敷に関する基礎や掘りゴタツの跡も確認されたが、それ以外のものについては屋敷が建築される以前に存在した集落跡と考えられる。調査範囲が狭小で建物等のプランを確認することができなかったことや、出土遺物の数が少なく時代決定の根拠に乏しいため不明な点が多いが、数少ない資料から中世から近世にかけての集落跡の一部と推測される。

南側の2区は1区より約1m低い位置から遺構が確認された。溝のほか土壌やピットが数基のみ検出されたが、遺構内から遺物が全く出土せず、災害と思われる後世のカクランを受けるとともに激しい湧水に悩まされ、詳しい調査ができず悔やまれる結果となった。このため、詳細は良く解らなかったが、試掘調査で確認された遺物から考えると、古代から中世にかけての集落跡の一部と推測される。

また、遺構は確認できなかったが、9世紀の須恵器が出土したことは、同時代に既に安宅地区に人が生活していた証拠となりえるもので、安宅地区に古くから伝わる古代山岳寺院の曼荼羅寺に関する伝説を裏付ける資料の1つになると考える。周辺に同時代の遺構が存在する可能性が示唆される貴重な資料である。

今回の調査で、縄文時代や弥生時代及び古墳時代の遺構は勿論のこと、遺物が1点も確認されていない。安宅地区から約3km西に位置する木城地区で平成20年に実施した木城遺跡群の発

掘調査では、縄文時代から中世までの遺構や遺物が数多く発見されただけでなく、旧石器時代の石刃も出土した。安宅地区は地形的に木城地区と類似しており、範囲的にはより広大である。さらに、北側の丘陵には町指定史跡の戸山原古墳 1 号墳を有する戸山原丘陵が存在し、丘陵の北側には弥生時代から中世までの集落が確認された宮前遺跡群が存在する。また、未見だが昭和 40 年代に行われた安宅地区にあるゴルフ場建設の際、敷地の一部に古墳と思われる高塚が幾つも確認されたそうだが、全て敷地造成の際、未調査のままブルドーザーで破壊されたという。このように周辺には数多くの遺跡が存在しており、安宅地区だけ遺跡が存在しないのは不自然であると推測するのが普通であり、安宅地区にはまだ確認されていないものの多くの遺跡が存在する可能性が高いと考える。また、今回の調査で硬質頁岩の碎片が 1 点出土した。製品でないものの木城遺跡群から出土した石刃と材質が同じであり、今後は発掘調査の際、安宅地区でも木城地区同様旧石器時代の遺物が存在する可能性を考慮する必要があると考える。

以上のように、今回の調査は道路工事に伴うものであるため細長い調査区となり面積も狭小だっただけでなく、工事との関連から十分な調査期間を設定することができなかった。その中でも安宅地区で初めて実施された学術的調査という点で今回の調査は大変有意義なものであることは間違いないことである。幾度の災害に見舞われたといっても炭鉱と無縁な農村地帯であり、これまで大きな開発もなかったことから未見の遺跡が存在する可能性も多いに期待される場所である。今後の調査、研究により安宅地区の新たな解明を期待しつつ本報告書の結びとしたい。

第4章 図版

PLATE

※図版中の遺物番号は、第2章第1節中の出土遺物実測図並びに第2節の出土遺物観察表の番号と一致する。



安宅イバノ本遺跡から戸山原丘陵を望む（航空写真・南から）



安宅イバノ本遺跡から戸谷ヶ岳方面を望む（航空写真・北から）

図版 .2



安宅イバノ本遺跡全景 1 (航空写真・北から)



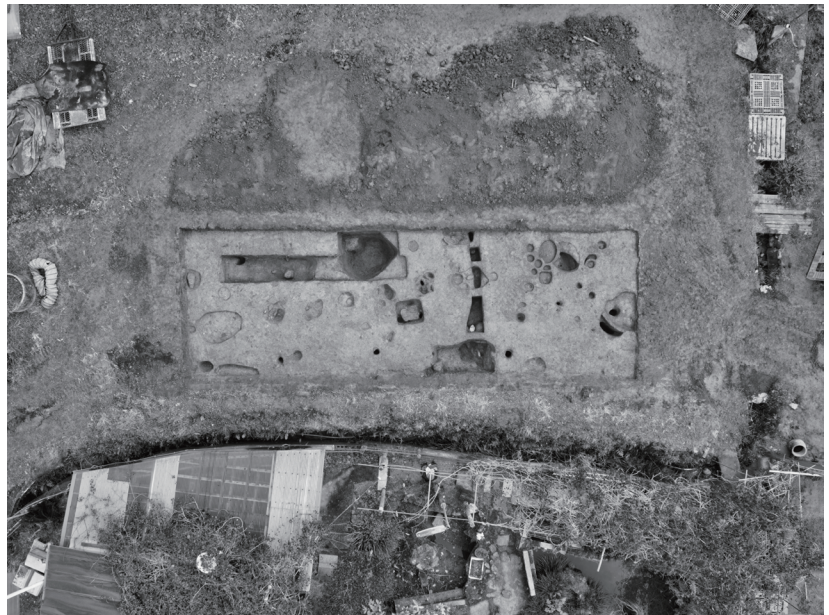
安宅イバノ本遺跡全景 2 (航空写真・南から)

図版 .3

安宅イバノ本遺跡全景 3
(航空写真・真上から)



安宅イバノ本遺跡 1区全景
(航空写真・真上から)



安宅イバノ本遺跡 2区全景
(航空写真・真上から)

図版 .4



安宅イバノ本遺跡 1区全景（北から）



安宅イバノ本遺跡 1区南側及び2区全景（北から）

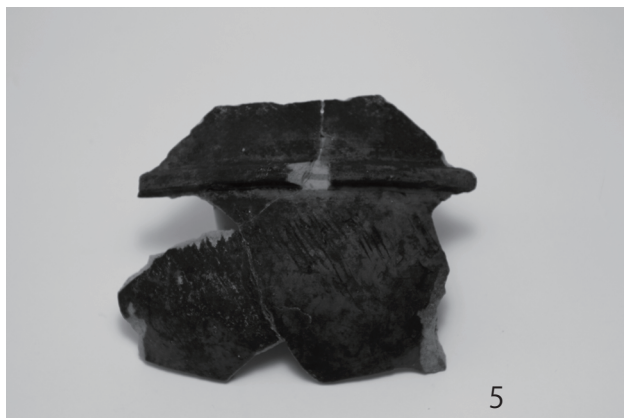
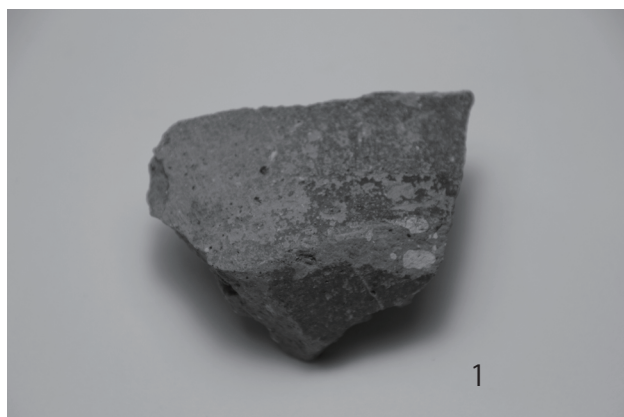


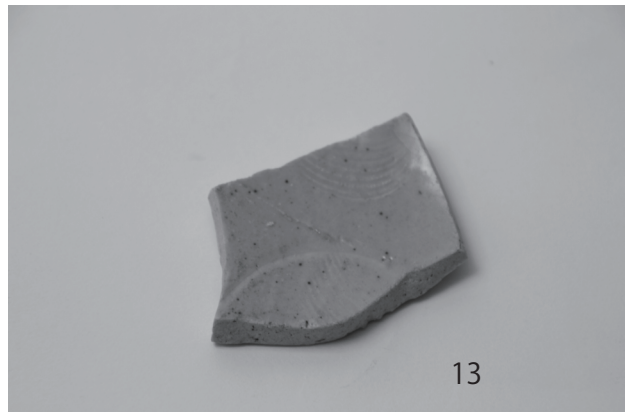
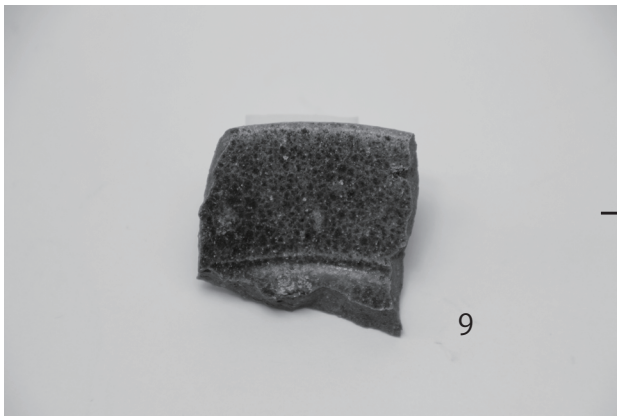
安宅イバノ本遺跡 1区井戸掘削状況（東から）



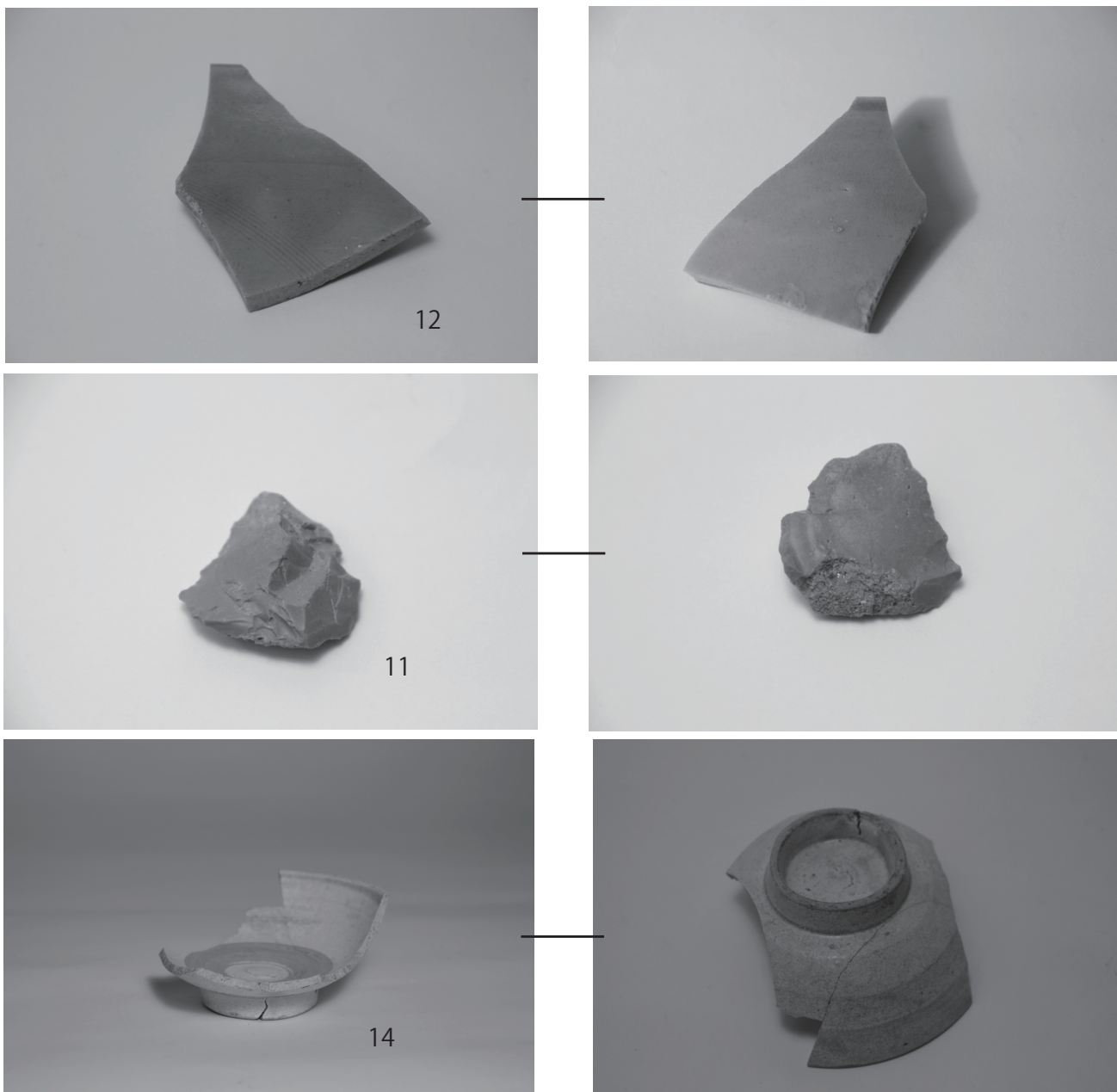
安宅イバノ本遺跡 1区井戸掘削状況（南東から）

図版 .6





図版 .8



安宅イバノ本遺跡出土遺物写真 3

報 告 書 抄 録

ふりがな	あたかいばのもといせき							
書名	安宅イバノ本遺跡							
副書名	川崎町大字安眞木所在の埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	川崎町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	末 吉 隆 弥							
編集機関	川崎町教育委員会							
所在地	〒827-8501 福岡県田川郡川崎町大字田原786-2							
発行年月日	2021年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		東経	北緯	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あたかいばのもといせき 安宅イバノ本遺跡	福岡県 田川郡 川崎町 大字安眞木	40 60 52		130° 49' 32"	33° 33' 05"	20200114 ～ 20200120	200	町道新設整備工事
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	散布地 集落跡	古墳 古代 中世 近世	溝 井戸 土壇、Pit等	2本 1基 多数	須恵器 瓦器 硬質頁岩碎片	土師器 陶磁器		
要 約	<p>今回の調査は、町道イバノ本大井手線整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。</p> <p>発掘調査に先立ち前年の秋に実施した試掘調査において、安宅地区で初めて遺構を確認した。特に、第2層目からプランがはっきりしない土壇を確認し、周辺地形の把握や住民への聞き取り調査により、縄文時代の遺構である可能性を考え発掘調査へ臨むことになった。</p> <p>発掘調査では、対象地内を東西に流れる自然流水路を挟んで北側を1区、南側を2区と称する2つの調査区を設定した。1区では、試掘調査のトレンチより浅い場所から中近世の土壇やPitが多数検出され、集落の一部であることが確認された。また、試掘調査のトレンチ内から検出された土壇は、調査の結果、井戸の跡であることが判明した。2区は土壇やピットが数基のみ検出され、出土遺物から古代から中世にかけての遺構であると推測されるが、全体に後世の災害によるものと思われるカクランを受けるとともに、湧水が激しく詳細は良く解らなかつた。</p> <p>狭い範囲で部分的な調査となったため詳しい解明には至らなかつたが、安宅地区において初めて実施した発掘調査であるとともに、当地域の解明につながる資料を得ることができた貴重な調査であり、今後の調査が期待される。</p>							

安宅イバノ本遺跡

川崎町文化財調査報告書

第20集

令和3年3月31日

発行 川崎町教育委員会

福岡県田川郡川崎町大字田原786-2

印刷 マツオ印刷株式会社

福岡県嘉麻市上山田407番地